

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月25日現在

機関番号：30119

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530872

研究課題名（和文） 小学校の「アイヌ民族の歴史と文化」学習のための授業開発

研究課題名（英文） Researching the designing of lessons of relevant Ainu subjects in the elementary school setting

## 研究代表者

伊藤 勝久（ITO KATSUHISA）

苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授

研究者番号：90364299

研究成果の概要（和文）：「アイヌ民族の歴史と文化」学習を取り巻く学校や教育課程の現状を整理し、その課題を指摘するとともに、適切な授業実践と教材開発のためにどのように考え、何をしていくべきなのかを考察。また、アイデアを形にすべく、試案的に教材（自主研修のための自学自習教材・授業で使用するスライド素案）を作成するとともに、博物館などの生涯学習拠点と学校との連携を模索した。

研究成果の概要（英文）：In this study, focusing on the current statuses of curricula in schools and of instruction in classes, we noticed several problems. For resolving the problems, we considered ways to design appropriate lessons and instructional materials. In this study, we also tried to design various instructional materials, such as self-study materials for the learning of relevant Ainu subjects for teachers and power-point slides for use in classrooms. In addition, we attempted to create cooperative classes between the elementary school and lifelong learning facilities, such as museum.

## 交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 2011年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2012年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 総計     | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：学校教育・アイヌ教育

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が2度にわたり受託された、(財)アイヌ文化振興／研究推進機構による助成事業「北海道の義務教育初等教育学校におけるアイヌ民族伝統文化理解教育の現状」による、研究成果が起点となっている。

北海道の小学校での、授業におけるアイヌ民族の取り扱い、郷土や開拓の歴史に付随

する様な浅薄なものが大半を占め、アイヌ民族に関する知識を持たない教員は市町村編の社会科副読本の記述に頼り授業を行う傾向があった。この記述や取り上げ方、知識の厚みや信頼性に関しては地域ごとの偏差も大きく、教員の取り上げ方や副読本の記載自体が、子ども達にアイヌ民族に対する偏見やステレオタイプを醸成する要因となる事も

指摘されている。

小学校の授業での取り扱いが、児童の人生の中でのアイヌ民族に関わる知識の第一歩になる事も多く、学校における適切な授業実践のための支援が必要とされる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、北海道の小学校における「アイヌ民族の歴史と文化」に関する教育の現状を把握することであり、その上に立ち、アイヌ民族に関わる適切な理解を図るため教員のための具体的な授業支援策を検討することである。

研究当初、本研究では、「研究開始当初の背景」で述べたような「アイヌ民族の歴史と文化」を取り上げる際に市町村編社会科副読本を偏重する道内小学校の一般的状況を前提として、取り扱う内容や知識の量に偏差の大きい市町村編社会科副読本に変わり得る「指導書」的なものの提示を目的としていた。

しかし、2年間にわたる情報収集の結果、現場の多忙な状況と社会的なプレッシャー、さらにはより過密化する教育課程が、「教科書ではほとんど取り扱われていない」アイヌ民族の歴史と文化に関わる知識を遠ざけているものと解釈された。すなわち、仮にいかにも“完全”な「指導書」が集成されたとしても、それが学校において授業を行う教員を取り巻く実情にそぐわないものであれば、その有用性は限りなく低くなるであろう。

それゆえ本研究では、教員を「アイヌ民族の歴史と文化」を取り扱う授業に向けていくために、またできるだけ適切な知識を浸透させていくために何をしていくべきなのかを考察し、そのアイデアを形にすべく、教員支援のための教材作成の方向性、博物館などの生涯学習拠点と学校との連携のあり方などを模索し、具体化していく。

## 3. 研究の方法

本研究では、「アイヌ民族の歴史と文化」学習の現状把握のため学校および市町村教育委員会での授業参観と聞き取り調査を行っていく。聞き取り調査のインフォーマントとなるべき小学校と市町村教育委員会の選定は、研究代表者が平成19年度に全道の小学校を対象に行ったアンケート調査の回収票をもとに、「アイヌ民族の歴史と文化」学習に関して前向きに取り組んでいる小学校を抽出し調査への協力を依頼、訪問する日程の調整を行うとともに、当該市町村教育委員会とも連絡を取り調査依頼および調査日程の調整を行う。

小学校においては「アイヌ民族の歴史と文化」に関わる授業に関し、①学年、②教科（もしくは教科外活動）、③単元（含む配当時間と構成）、④本時の構成（内容と展開）、⑤授

業内容（「アイヌ民族の歴史と文化」に関わる知識）を中心に聞き取りを行い、可能ならば授業参観を行う。また、市町村教育委員会にあつては、「アイヌ民族の歴史と文化」に関する学習を所轄の学校で取り組むにあつての、①基底カリキュラムの中での位置づけ、②教員の適切な知識・認識などの構築を支援するための研究会、研修等への取り組み、③授業支援のための教材等の開発や購入、④授業支援のための人材の派遣等を中心に聞き取りを行っていく。これら一連の聞き取り調査、授業参観等は研究代表者である伊藤勝久（教育学）が中心となつて行う。

研究調査に当たっては、研究分担者である岡田路明（アイヌ文化）のアイヌ民族関連の知識および人脈を用いつつ、学校や教育行政の論理、教員や子どもたちの視点、学問的な観点、そしてアイヌ民族からの視点等を、できるだけ公平な立ち位置で取り扱えるよう注意していく。

なお初年度は、カナダ東部の先住民組織「シックスネーションズ」の学校を訪問し、伝統文化の取り扱いや学校での位置づけなどを、研究分担者である養島栄紀（歴史学）が調査する予定である。

また、2年目以降は、現場の小学校教諭の他、(財)アイヌ民族博物館、しらおいイオル事務所チキサニなどの生涯学習施設で学芸員として働く、若きアイヌ民族の方々とも連携をとりつつ、小学校との連携授業の報告や学校現場への提言等も斟酌していく。

最終年度には、3年間にわたる調査研究のまとめとして研究成果報告書を集成し、本科研で考察し作成した成果物の社会還元を図っていく。

## 4. 研究成果

本研究での道内小学校における聞き取り調査の経験により、「アイヌ民族の歴史と文化」学習の取り組みを行う学校（教員）は様々な学校環境や背景を持っており、その取り組みへのアプローチの違いにより以下の五つに類型化できるように考えている。①極めて熱心な教員が独自の信念・知識に則り行っている取り組み。②アイヌ民族の歴史や文化にかかる意識や知識は少ないものの、人権や郷土への関心から学習活動に取り入れる取り組み。③伝統的に学校独自の教育活動として位置づけている取り組み。④市町村教委の基底カリキュラムへの位置づけから、学校の年次計画に位置づけている取り組み。⑤市町村教委の指導により教育活動として位置づけている取り組み。

この中で①③の取り組みに関しては優れた活動も少なくないが、②④⑤では表面的、形式的な取扱いも多い。⑤の中には教育委員会の報告会やウェブページ上で活動を詳細

に述べながら、担当したとされる教員自体がその取り組みを知らず、筆者の聞き取り調査の際に露呈する例も複数実在する。その活動が次年度以降に他校のモデルとなるべく位置づけられているような場合は、架空の授業・存在しない事後検討の内容が他校の模範や参考とされていくのである。また、聞き取りの中では①の取り組みに対する学校管理職や教育委員会による妨害なども聴取し、一学校での事例ではあるが筆者自身も調査に際し体験した。「アイヌ民族の歴史と文化」学習をめぐる環境に関しては、改善されつつあるものの、これらの悪質な捏造や妨害は見えない所で（見えないように）未だに横行しているのも事実である。

結局、小学校において「アイヌ民族の歴史と文化」学習の実践を妨げる一番の要因は、学校と教員の多忙さにあるのかもしれない。「研究開始当初の背景」でも述べた市町村編副読本の内容への偏重は、そうした学校や教員の多忙さの裏返しでもあろう。学習指導要領での位置づけがなされず、教科書での取り扱いも少ない「アイヌ民族の歴史と文化」は授業で触れられなくても良い位置づけにあり、それにも関わらず一般の教員にとっては未知の知識の領域に広がっている。

本科学研究では、教育現場の現状把握から上記のような課題を見いだしたが、このような矛盾に満ちた「小学校での「アイヌ民族の歴史と文化」学習」に対し、その実践を適正さを保持しつつ一般化できるような処方箋は存在しない。しかしながら、我々は教育現場に関わる者、歴史学に傾倒する者、アイヌ文化にリアルな関わりを持つ者、そしてアイヌ民族として、この矛盾に対して様々な視点から解決しようと努力することができる。

本科学研究で取り扱っている課題は、ここにおいて完結できるものではない。とりあえず3年間の調査研究のまとめとして、我々がそれぞれの立場から「アイヌ民族の歴史と文化」学習のための授業開発に寄与できるよう、「研究成果報告書」（「主な発表論文等」の「図書」①を参照）という形で若干の提言と教材を構成した。

本報告書のI章では、序論的に「アイヌ民族の歴史と文化」学習を取り巻く現状を整理し、その課題を指摘するとともに、適切な授業開発のためにどのように考えていくことができるのか、何ができるのかを考察した。

続くII章では、I章で考察したアイディアに試案的に形を与え、教員のための自学自習教材の設計を試行した。この際気をつけたのは、静的に捉えられがちなアイヌの人たちの暮らし（明治期以前の状況を取り扱っている）のイメージを、生活者としてのその動きや考え方が生き活きと分かるように、またそれらの活動がいかに寒冷地の生活様式とし

て理に合っていたのかが分かるようにすることである。「食に関わる女性の仕事と食材」「食に関わる男性の仕事と食材」「衣類」「住居」の4回からなるこの教材では、残念ながら作成者等が意図するところが成功しているとは言い難いが、今後こういった趣旨で取り扱うテーマを拡充でき、より精緻に教材を構成できることが確認されたのは収穫である。

III章では、歴史学の学問的立場から、「アイヌ民族の歴史と文化」授業の可能性を追求した。ここでは、往事の和人とアイヌ民族との「モノ」を介した結びつきを取り上げることによって、文化の相互依存的な関係性を子どもたちにリアルに伝達しようとしている。そのため、歴史事実と学説に則った具体的な教材として、授業のためのパワーポイントの作成例を併せて提示した。

本研究の研究協力者である、中野巴絵（一般財団法人アイヌ民族博物館学芸員）、押野朱美（同伝承課）、押野里架（白老町役場しらいおイオル事務所チキサニ学芸員）の三名は、いずれも若きアイヌであり、自己の生活世界の中心に民族のアイデンティティを醸成しようとする者達である。彼女たちが執筆したIV章、V、VI章は、各々が小学校と連携しつつ関わってきた経験をもとに構成されている。具体的には「博物館を利用したの小学校との連携学習」「古式舞踊を用いた学習」「川漁の体験学習」がテーマとして取り上げられているが、これらの報告は「これだけは伝えておきたい」という、現代に生きるアイヌ民族から、授業を司る学校と教員へのメッセージとして受け止めてもらいたい。

本科学研究成果が、今後の「アイヌ民族の歴史と文化」学習を考えていく上での一助となればと思う

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

- ① 伊藤 勝久、学校教育における「アイヌ民族の学習」の課題-多文化的視座からの整理-、環太平洋・アイヌ文化研究、査読無、10巻、2013、pp. 19-30
- ② 藪島 栄紀、古代の「昆布」と北方社会-その実態と生産・交易-、環太平洋・アイヌ文化研究、査読無、10巻、2013、pp. 31-68
- ③ 藪島 栄紀、続縄文文化とは何か？-続縄文文化と弥生・古墳文化、そして倭・日本との交流-、北海道立北方民族博物館季刊「Arctic Circle」、査読無、84

- 卷、2012、pp. 4-9
- ④ 伊藤 勝久、地図入門期の導入指導に関する一考察-ガニエの「学習の条件」による階層的地図指導法の分析-、新地理、査読有、59 巻 3 号、2011、pp. 1-17
  - ⑤ 蓑島 栄紀、「肅慎羽」再考-平安期の「北の財」とエゾ認識-、環太平洋・アイヌ文化研究、査読無、9 号、2011、pp. 29-56
  - ⑥ 蓑島 栄紀、北方社会の史的展開と王朝・国家、歴史学研究会、査読有、872 巻、2010、pp. 38-48

[学会発表] (計 12 件)

- ① 伊藤 勝久、小学校のアイヌ民族文化理解教育の現状と課題、日本国際理解教育学会第 21 回研究大会、2011 年 6 月 19 日、京都橘大学
- ② 蓑島 栄紀、平安日本と擦文社会、北海道考古学会 2011 年度第 5 回月例研究会、2011 年 11 月 27 日、北海道大学総合博物館
- ③ 蓑島 栄紀、アイヌ史のなかの伝統・変容と構築-「続縄文」期・「擦文」期・「アイヌ文化」期の画期を再考する、国立民族学博物館主催特別展「千島・樺太・北海道アイヌのくらし」関連公開シンポジウム「温故知新 アイヌ文化研究の可能性を求めて」、2011 年 11 月 12 日、国立民族学博物館
- ④ 蓑島 栄紀、平成 23 年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業公開シンポジウム「中世への胎動 北の視点・南の視点」、2011 年 9 月 3 日、東北芸術工科大学
- ⑤ 蓑島 栄紀、古代蝦夷の形成・展開とその実態-文献史学の立場から-、北海道大学アイヌ・先住民研究センター主催第 2 回シンポジウム、2011 年 2 月 26 日、北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- ⑥ 伊藤 勝久、地図入門期の導入指導に関する一考察-ガニエの「知的技能の階層区分」による分析-、日本地理教育学会 2010 年度大会、2010 年 8 月 21 日、山梨大学甲府西キャンパス
- ⑦ 蓑島 栄紀、北方社会の史的展開と王権・国家、歴史学研究会 2010 年度大会 (古代史部会)、2010 年 5 月 23 日、専修大学生田キャンパス

[図書] (計 7 件)

- ① 伊藤 勝久編、ひまわり印刷、小学校の「アイヌ民族の歴史と文化」学習のための授業開発[科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 22530872 研究成果報告書]、2013 年、78 頁
- ② 蓑島 栄紀、十～十一世紀の北東アジア情勢と「北の中世」への胎動、人間田宣

- 夫編『北から生まれた中世日本』、2012 年、pp. 201-226
- ③ 蓑島 栄紀、北方世界との交流、荒野泰典、他編『律令国家と東アジア』、2011 年、pp. 305-318
  - ④ 蓑島 栄紀編、アイヌ史を問いなおす-生態・交流・文化継承-、2011 年、213 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 勝久 (ITO KATSUHISA)  
苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：90364299

(2) 研究分担者

岡田 路明 (OKADA MICHIAKI)  
苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：50445102

蓑島 栄紀 (MINOSHIMA HIDEKI)  
苫小牧駒澤大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：70337103